

近世以降昭和期にいたる旅行記・文芸書における岡山に関わる風景描写の分析*

The Analysis of The Landscape Description concerning Okayama through Books of Travels, Arts and Literature
since Early Modern Times to The Syouwa Era

森 尚彫**・樋口輝久***・馬場俊介****

By Naoe MORI, Teruhisa HIGUCHI and Shunsuke BABA

本論文は、過去の風景の記述から、岡山の魅力や特色、外からの印象等を探ることで、岡山の地域性を見つけ、それをこれからの地域づくりに役立てることを目的としている。研究の手法としては、近世以降昭和期の外国人と日本人の旅行記・文芸書における岡山に関する風景描写を抽出し、記述内容を分類、分析することにより、その差異や共通点を探っている。具体的には、外国人と日本人との視点による比較、自然景と人文景の分類等を行った。そして、特に岡山市における風景描写に関して、倉敷市等との比較を行うことで、風景の特徴や地域性を考察した。結論として、岡山市は、旭川を筆頭に河川の描写が多く、人文景としては、後樂園等の名所が中心であること、また、戦後、記述数が増加した倉敷市と対照的に、時代とともに風景描写が減少し、特に町並みに関する描写は皆無になったこと、瀬戸内海沿岸地域に関しては、戦後、記述内容が変化し、岡山市との関連はみられなかったこと、以上の三点をあげている。

1. はじめに

岡山県は中国地方の東部に位置し、その県庁所在地である岡山市は、人口約63万人で、日本の中での地方都市、中核都市と位置づけられているが、その一方で、中心市街地、商店街である岡山駅前や表町辺りの衰退という問題点があり、それに伴い、都市としての魅力や活力が欠けている印象をうける。また、隣接する倉敷市のような観光地としての賑わいがあるわけではなく、後樂園や岡山城といった名所も岡山市という都市づくりに生かされているとは言いがたい。さらに、都市再開発や近年の市町村合併という都市としての課題も山積し、その過程で、地域の個性が失われていると感じられる。

はたして、岡山市は以前から活力の感じられない現在のよう都市であったのだろうか。もし、かつては魅力があり、活気の感じられる都市であったのであれば、それはどのようなものであり、それがどうして失われたのか、どのように変化してきたのかを探ることで、今後のよりよい地域づくりやまちづくりに活かしていくことができるのではないだろうか。

それを探る方法として、風景の変化を調べることがあげられる。これまでに、様々な風景論があり、風景を科学的、分析的に記述することで地域を語り、それによって、風景論を地域論として捉えたものや風景から日本の姿を捉えたもの等

があった¹⁾。

また、風景は、地域の文化や個性を含む歴史や風土の現れであると考え、風景は地域の評価における指標の一つとして考えることができる。つまり、風景を分析することで、地域の姿や地域性、風土性がみえてきて、その地域のことを知る手がかりになると考えられる。そして、過去の風景の記述を調べることは、今後の地域や整備のあり方を考える際の一つの参考になり、それは、これからの我々の生活のあり方や社会のあり方を考えることにもつながってくると思われる。

過去の風景の描写を調べた同様な研究には、瀬戸内海をとりあげたものがあるが²⁾、岡山市といった特定の地域をとりあげた研究はみられない。しかし、瀬戸内海のように、景勝地といわれているもの以外にも、その地域にしかない風景、その地域だけの特徴は存在するのではないだろうか。

したがって、岡山市の風景がどのように変化し、これまでどのように捉えられ、過去の書物にどのような描写がされてきたかを調べることで、地域、都市としての岡山市の姿、まちの印象の変化を捉えることができるのではないかと考えられる。本論文は、過去の書物において、岡山の風景、岡山の姿がどのように捉えられてきたかを調べることで、岡山の地域的特性、岡山らしさというものを探り、それらを今後の地域づくりに活

* Keywords: 岡山、風景描写、歴史的変遷

**岡山大学大学院自然科学研究科環境システム学専攻(論文提出時)
(〒700-8530 岡山市津島中 3-1-1)

*** 正会員 岡山大学助手(環境理工学部環境デザイン工学科)

**** 正会員 岡山大学教授(同上)

かし、役立てることができるように、岡山の過去の魅力や特徴を明らかにすることを目的としている。

研究方法としては、岡山に関する記述がある書物を探し、その記述内容を分類、分析することを行っている。対象地域は、岡山市を中心地域とし、その周辺の倉敷市や瀬戸内海沿いの地域までを範囲としてとりあげ、それ以外の地域はその他とした(図-1)。

研究対象の書物は、外国人が岡山をどう捉えていたかも考えるため、外国人の書物がみられるようになった江戸時代以降の書物を対象とし、江戸時代以降昭和期までの外国人、日本人の書物から、岡山市を中心に、風景の記述があるものを探した。書物の種類に関しては、人間の主観や風景の捉え方も含めて考えるため、地形や地質等客観的な記述がされているものではなく、旅行記・文芸書といった人間が描いている風景、岡山の印象や風景のよしあし等の評価がなされているものを極力探した。また、今後に活かし、参考にすることを目的としているため、記述内容は、岡山に関するいい印象やプラスになる記述を中心にとりあげている。

本論文はつぎのような構成となっている。まず2章で、今回調査した書物を時代ごとに分類し、その内容を時代背景とともに述べ、整理している。

次に、3章では、各書物の記述内容を風景の構成要素である視点と対象に分類し、外国人と日本人による視点の比較、自然景と人文景による対象の比較、自然景と人文景の各対象における記述内容の比較を行っている。

4章は、本論文の中核部であり、研究の中心地域である岡山市に関する風景描写をとりあげ、岡山市に関する記述数の変遷、岡山市の自然景、人文景の分析を行っている。そして、各対象に関する記述内容を紹介することで岡山市の姿やその印象を明らかにしようとしている。

5章では、倉敷市、瀬戸内海沿岸地域に関する記述をとりあげ、各記述数の変遷、記述内容の分析を行うことで岡山市との比較を行い、その違いから岡山市の特徴を明らかにすることを試みている。

2. 時代別による書物の分類

本章では、各時代で、岡山に関する記述がある書物を外国人、日本人別に分類した。時代区分は、江戸、明治、大正・昭和戦前、戦後の4期とし、各時代背景と記述が見つかった書物について概説する。

また、今回記述が見つかった約100冊の書物から、主要なものをその著者や記述内容によって、旅行者、定住者、出身者という視点と岡山市、倉敷市、瀬戸内海沿岸、その他の地域という4つの地域と河川や山等の自然景、町並みや構造物等の人文景という対象に分類し、表に示している(表-1～表-8)。表中の表記は、旅:旅行者、住:定住者、出:出身者、岡:岡山市、倉:倉敷市、瀬:瀬戸内海沿岸、他:その他の地域、構:寺社・橋等の構造物、園:公園とし、町、町並み、城、自然、川、山、塩田は、そのまま記している。



図-1 岡山県における対象地域 (著者作成)

(1)江戸時代に関する書物

江戸時代は、鎖国下のため、岡山に関する記述があった外国人の書物は、瀬戸内海を航行したオランダ商館員、朝鮮通信使に関連したもので、日本人の書物は、瀬戸内海、山陽道を通った人物による紀行文が見つかった。

a)外国人

鎖国政策のため、日本に来ていた外国人は、オランダ商館員や朝鮮通信使に関連した人物に限られ、その記述内容も瀬戸内海沿岸に関するものだけであり、岡山市に関する記述は見つからなかった。

表-1 江戸時代の外国人

人物	書名	視点	地域	対象
オランダ商館員(蘭)	『長崎オランダ商館日記』ほか	旅	瀬	町並み
ケンペル(独)	『日本誌』	旅	瀬	自然、町並み
シーボルト(独)	『日本』『参府旅行中の日記』	旅	瀬	自然、塩田、町並み
申維翰(朝)	『海游録』	旅	瀬	自然、町並み
金仁謙(朝)	『日東壯遊歌』	旅	瀬	構、町並み
朝鮮通信使(朝)	『海槎録』ほか	旅	瀬	構、町並み

(参考文献 3)～12)より著者作成)

b)日本人

外国人と同様に瀬戸内海を航行している人物と山陽道を通った人物による紀行文が見つかり、外国人とは異なる点として、山陽道を旅した司馬江漢(1747-1818)等による岡山市に関する記述が存在していることがあげられる。

表-2 江戸時代の日本人

人物	書名	視点	地域	対象
遠山景晋	『続未曾有記』	旅	瀬	町
大田南畝	『革命紀行』	旅	瀬	町
西山宗因	『津山紀行』	旅	他	町
橘南谿	『西遊記』	旅	他	自然
司馬江漢	『江漢西遊日記』	旅	岡 瀬 他	川、町並み、構
菱屋平七	『筑紫紀行』	旅	岡 瀬 他	川、山、町並み、構
野田成亮	『日本九峰修行日記』	旅	岡 他	川、山、城、構
高木善助	『薩陽往返記事』	旅	瀬	町

(参考文献 13)～15)より著者作成)

(2)明治時代に関する書物

明治時代は、鎖国は解かれたが、外国人の旅行制限があったため、日本国内の外国人旅行者は少なく、岡山に関する外国人の書物は、岡山に来た、雇われ外国人によるものがほとんどであった。日本人のものは、紀行文の他に岡山出身者による書物がみられるようになった。

a)外国人

鎖国は解かれたが、外国人に対しては、日本国内での旅行制限がなされ、それによって、開港場等の特定の地域とその10里の半径内にしか外国人は入れず、それらの地域に岡山は含まれなかったため、岡山に来たのは、雇われ外国人等岡山に来るといった目的を持った限られた人物のみであり、岡山に関する記述も彼らによるものが中心であった。その中で、岡山市に関する詳細な記述があるものに、岡山市に宣教医として招かれたベリー(1847-1936)に関する書物がある。この『ベリーの手記』¹⁷⁾は、ベリーが1879年から5年間岡山市に滞在していた時のことを記した日記を娘であるキャサリン・ベリーがまとめたもので、岡山市の風景や後楽園、岡山城等に関する描写がなされている。

また、明治時代以降は、外国人による瀬戸内海の往来やそれに関する記述のある書物はみられるが、船舶の発達によって、目的地に直接たどり着けるようになり、江戸時代のような風待ち、潮待ちがなくなったことで、逆に、航行途中での港への停泊の機会は減り、そのような利用が主だった岡山の瀬戸内海沿岸地域に関する記述は減少していた。

表-3 明治時代の外国人

人物	書名	視点	地域	対象
チェンバレン(英)	『ラフカディオ・ハーン著作集』	旅	岡	園
ムルデル(蘭)	『日本列島の三つの海峡』	旅	岡	自然、川
バルトン(英)	『岡山市水道誌』	旅	岡	川
ベリー(米)	『ベリーの手記』	住	岡	自然、川、山、城、園
アダムス(米)	『アダムス女史一夕話』	住	岡	町、川

(参考文献 16)～20)より著者作成)

b)日本人

明治時代になると、日本人のものでは、旅行記とともに、出身者や定住者による書物が現れはじめ、彼らの出身地である様々な地域に関する記述や岡山市に関する詳細な記述もみられるようになって来る。旅行者では、成島柳北(1837-1884)の『航薇日記』²¹⁾に岡山市や岡山の瀬戸内海沿岸部に関する詳細な記述があり、出身者においては、岡山市出身の内田百閒(1889-1971)や福田英子(1867-1928)の書物に、当時の岡山市に関する多数の記述がみられた。

表-4 明治時代の日本人

人物	書名	視点	地域	対象
成島柳北	『航薇日記』	旅	岡 瀬	自然、城、 町並み、構
森林太郎	『鷗外全集』	旅	岡	園
夏目漱石	『漱石全集』	旅	岡	川、園、城、構
大町桂月	『迎妻紀行』	旅	他	自然
山田耕筰	『山田耕筰著作 全集3』	住	岡	山、園
田岡嶺雲	『教奇伝』	住	他	自然、町並み
黒田壽男	『凍てつく大地に 種子を』	出	他	自然、 川、山
薄田泣菫	『艸木虫魚』	出	瀬	自然
木山捷平	『角帯兵児帯・わ が半生記』 『木山捷平全詩 集』	出	岡 他	自然、 園
片山潜	『自伝』	出	他	自然、川
正宗白鳥	『正宗白鳥全集』 『正宗白鳥集』	出	他	自然
竹久夢二	『夢二書簡』ほか	出	瀬	自然、川、 町並み
大原孫三郎	『大原孫三郎傳』 ほか	出	倉	自然、川、 町並み、構
福田英子	『妾の半生涯』 『福田英子集』	出	岡	自然、川、 山、園、 町並み
内田百閒	『新輯内田百閒 全集』ほか	出	岡 瀬	自然、川、 山、城、 園、構、 町並み

(参考文献 21)～(49)より著者作成

(3)大正・昭和戦前期に関する書物

明治末期に外国人旅行制限の撤廃、山陽鉄道の開通等があり、日本における外国人の往来は増えているはずであるが、岡山は通過される場合が多かったようで、外国人による書物は、数多くは見つからず、岡山第六高への留学者等の記述がある位で、日本人の方に、鉄道利用の旅行者による書物等が見つかった。

a)外国人

明治末期より、旅行制限の撤廃、山陽鉄道の開通、船舶の発達等が起こったが、それによって外国人による記述が増えた様子はみられず、岡山に関する記述は多くは見つからなかった。その中で、岡山市に関する詳細な記述があるものに、1915年から約3年間、岡山第六高に留学していた郭沫若(1892-1978)に関する書物や1917年に行なった山陽道沿いの旅行中に、岡山市等を通った際の描写があるスタール(1858-1933)の『山陽行脚』⁵⁶⁾があった。

表-5 大正・昭和戦前期の外国人

人物	書名	視点	地域	対象
郭沫若(中)	『郭沫若自伝』ほ か	住	岡	自然、川、 山、園、城
陶晶孫(中)	『日本への遺書』	旅	岡	園
スタール (米)	『山陽行脚』	旅	岡 瀬 他	自然、 川、構
クローデル (仏)	『孤独な帝国日 本の一九二〇年 代』	旅	岡	城

(参考文献 50)～(57)より著者作成

b)日本人

日本人の書物で、岡山に関する記述があったのは、旅行者、出身者によるものが半々で、田山花袋(1871-1930)等の鉄道利用の旅行者によるものが現れははじめています。出身者では、岡山市出身の吉行あぐり(1907-)や坪田譲治(1890-1982)、倉敷市出身の大原総一郎(1909-1968)らによる自らの出身地に関する詳細な記述がみられた。

表-6 大正・昭和戦前期の日本人

人物	書名	視点	地域	対象
脇水鐵五郎	『車窓から観た自 然界—山陽道—』	旅	岡 瀬 他	自然、川、 山、構
柳宗悦	『柳宗悦全集』	旅	他	町並み
田山花袋	『旅』 『田山花袋全集』	旅	岡 瀬 他	自然、川、 園、構
大原総一郎	『大原総一郎随 想全集』ほか	出	倉	自然、川、 町並み、 構
吉行あぐり	『梅桃が実ると き』ほか	出	岡	川、城、 園、町並み
坪田譲治	『坪田譲治全集』	出	岡	自然

(参考文献 58)～(69)より著者作成

(4)戦後期に関する書物

戦後になると、外国人の観光旅行による記述が増加し、倉敷市に関する記述も現れははじめる。日本人のものでは、戦時中岡山に疎開していた人物の記述や旅行者、出身者による記述がみられた。

a)外国人

外国人の書物は、岡山への観光によるものを中心に、岡山市や瀬戸内海沿岸に関する記述もみられるが、特に、ブランデン(1896-1974)等の書物にみられるように倉敷市への観光が増え、倉敷市に関する記述が増加している。また、岡山市だけをとりあげた書物はみられなくなった。

表-7 戦後期の外国人

人物	書名	視点	地域	対象
コータツツィ (英)	『東の島国 西の島国』 『日英の間で』	旅	岡 倉 他	町並み、 園、構
鄭津梁 (台)	『鄭津梁の日本見聞記』	旅	岡 倉	自然、川、 町並み、 園、城、 構
ブランデン (英)	『日本通路』	旅	倉	町並み、 構
リーチ(英)	『東と西を超えて』 『パーナード・リーチ日本絵日記』	旅	倉 他	川、 町並み、 構
リチャー(米)	『日本人への旅』	旅	瀬	自然、山、 町並み
ブース(英)	『ニッポン縦断日記』	旅	瀬 他	自然
ピッツ(米)	『外国人による日本地域研究の軌跡』	住	岡 瀬	自然、山、 塩田、構

(参考文献 70)～(78)より著者作成

表-8 戦後期の日本人

人物	書名	視点	地域	対象
永井荷風	『罹災日録』	住	岡 他	自然、川、 町並み、園、 城、構
谷崎潤一郎	『疎開日記』	住	他	自然
横溝正史	『探偵小説五十年』ほか	住	他	自然、 川、町
江戸川乱歩	『探偵小説四十年』	旅	他	自然
井伏鱒二	『井伏鱒二全集』	旅	瀬 他	自然、川
清岡卓行	『詩禮傳家』	旅	倉 他	自然、 川、構
野田知佑	『日本の川を旅する』	旅	他	自然、川、 町並み
宮脇俊三	『時刻表おくのほそ道』 『線路のない時刻表』	旅	他	自然、川、 山、構
小川洋子	『妖精が舞い下る夜』	出	岡 倉 瀬	川、構、 町並み
吉行淳之介	『日々すれすれ』 『吉行淳之介全集』	出	岡	川

(参考文献 79)～(93)より著者作成

b)日本人

戦後の日本人の書物は、戦時中から戦後にかけて、岡山へ疎開していた永井荷風(1879-1959)、谷崎潤一郎(1886-1965)、横溝正史(1902-1981)らによるものや旅行記が中心になっている。その中で、永井荷風『罹災日録』⁷⁹⁾では、戦時中の岡山市に関する詳細な描写がなされている。その他の書物で、岡山市に関する記述があるものは、多くは見つからず、倉敷市やその他の地域に関する記述があるもののほうが多くなっていた。

3. 記述内容の分析

本章では、各書物の記述内容の分析を行う。風景は、風景を見る側の視点と見られる側の対象からなると考えられるため、風景の構成要素として視点と対象に分類し、それぞれの項目により分析を行っている。まず、(1)視点による比較において、外国人と日本人という視点の違いによる記述内容の比較を行い、(2)対象による比較において、自然景と人文景との比較を行って、その後、各対象において、具体的な記述内容の分析を試みている(分析に用いた図-2～図-12、図-14、図-15は全て著書作成)。

(1)視点による比較

本節では、外国人、日本人という視点別に記述されている地域の歴史的な変化を見ることで、視点の違いによる記述内容の比較を試みている。

a)外国人の視点

外国人による記述内容を図-1で示した4つの地域に分類し、その歴史的変遷をみると、外国人の視点の特徴として、戦前までは、瀬戸内海沿岸、岡山市に関する記述が中心であるということと戦後になってから、倉敷市に関する記述が出現しているという2点があげられる(図-2)。

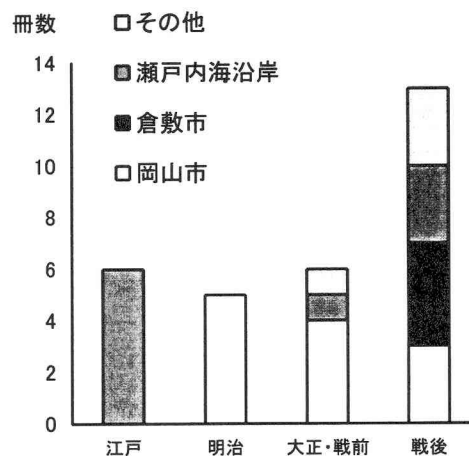


図-2 外国人の記述地域の変遷

b)日本人の視点

日本人においては、岡山の出身者が自らの故郷を原風景的に記したものがあため、書物にとりあげられている地域は多様であり、岡山市に関する記述は、明治時代をピークにして、以降記述数は減っていることがあげられる(図-3)。

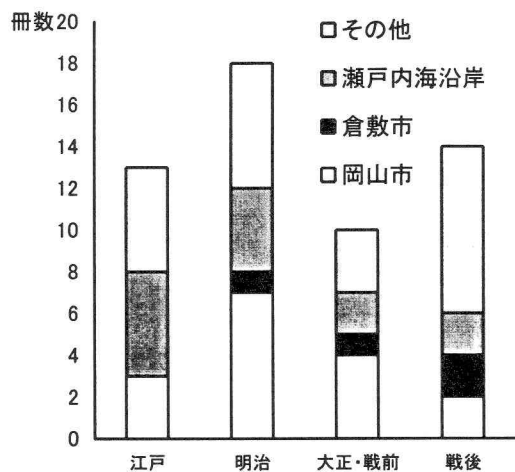


図-3 日本人の記述地域の変遷

(2)対象による比較

次に、外国人、日本人別に自然景と人文景による対象の比較を行い、各対象において具体的な記述内容を比較することで、その違いを考察した。

自然景と人文景の比較では、図-4、5から日本人の方が、自然景の描写は多いことがわかるが、外国人と日本人とで極端な差はみられなかった。

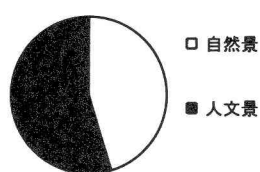


図-4 外国人の自然景、人文景の割合

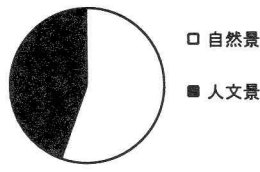


図-5 日本人の自然景、人文景の割合

a)自然景

自然景において、外国人、日本人別に記述内容を見ると、特徴としては、外国人、日本人の両方において、河川に関する記述が多く、日本人においては、自然景の約半分が河川についての記述であった(図-6、7)。

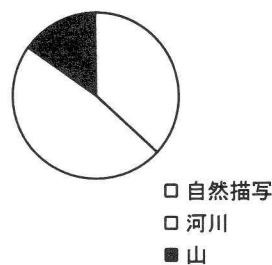


図-6 外国人の自然景に関する記述内容の割合

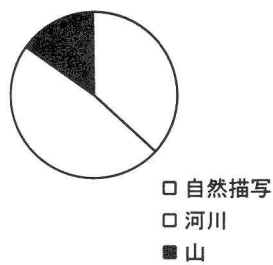


図-7 日本人の自然景に関する記述内容の割合

b)人文景

人文景における記述内容を見ると、人文景においては、外国人、日本人ともに岡山市の後楽園や岡山城といった名所に関する記述が多いことがわかる。また、外国人の記述では、町並みより、後楽園や岡山城、倉敷市の大原美術館や美観地区等の名所に関する記述が多く、後楽園や岡山城に関する記述は、日本人との差はあまりみられないが、大原美術館や美観地区に関する記述では、外国人の方が多くなっている(図-8、9)。

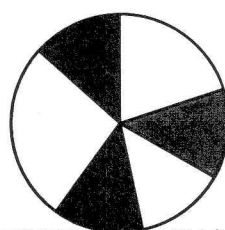


図-8 外国人の人文景に関する記述内容の割合

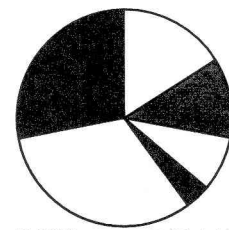


図-9 日本人の人文景に関する記述内容の割合

図-8 外国人の人文景に関する記述内容の割合

図-9 日本人の人文景に関する記述内容の割合

4. 岡山市に関する記述

ここでは、本研究の中心地域である岡山市に関する記述をとりあげ、岡山市の風景に関する考察を行う。

まず、視点別に、岡山市に関する記述の歴史の変遷を見ると、外国人による記述が現れるのが明治時代で、それ以降は、外国人、日本人ともに、岡山市に関する記述数は減少している(図-10)。

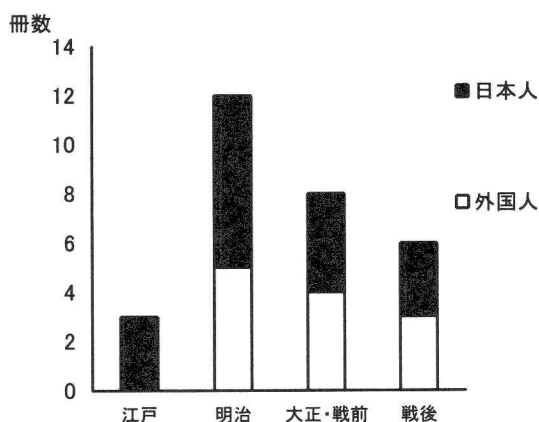


図-10 岡山市の記述数の変遷

次に、岡山市の自然景、人文景に関する記述を具体的にとりあげ、その内容についての分析を行う。

(1)岡山市の自然景

岡山市の自然景において、何が記述されてきたかを歴史的に見ると、各時代を通して、最も多く記述があるのは旭川

に関するものであった(図-11)。図-11は、時代ごとに、全体の記述数における各対象の割合を示したものである。旭川は、岡山市の河川についての記述のほとんどを占めていて、百間川等、その他の河川についての記述は数えるほどしかなかったため、ここでは、河川という区分を行わず、旭川だけを採り上げ、他の河川は、その他の区分に含めている。このことから、岡山市の自然景における描写の中心は、旭川であることがわかる。また、岡山市内の自然に関する描写自体も多く存在していて、岡山市は自然豊かな地域と捉えられているということがあげられる。

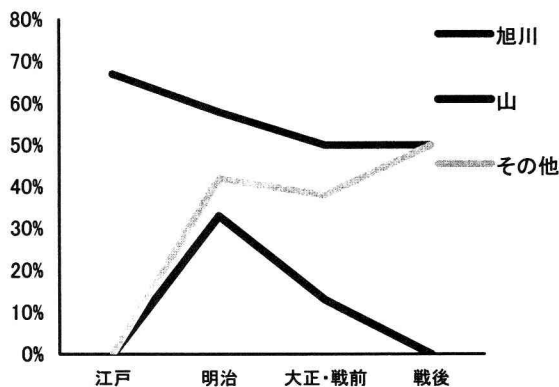


図-11 自然景における各対象の割合

a) 旭川に関する記述

本項では、岡山市の自然景において、最も記述が多かった旭川がどのように記述されているかを具体的にとりあげる。旭川は、明治時代からすでに外国人に認識されており、旭川に関する好意的な記述はその頃からみられる。まず、明治期の『ペリーの手記』には、「旭川に跨り五哩下流は内海にこの川は注ぎこの川は運輸に又漁業の便があり。」⁹⁴⁾という記述があり、その後、大正時代の『郭沫若・日本の旅』には、「岡山市内に旭川という小さい川があり、沙湾の茶溪のようで、水が清く、泳ぐのに最高です。」⁹⁵⁾という記述がみられる。また、日本人のものにも、明治時代のことを記している黒田壽男の『凍てつく大地に種子を』の中に、「旭川は水量も豊かであり、舟の運行に、危険な難所という程の場所もなく、流水の速度も緩やかで、川舟が上下するには適していた川であった。」⁹⁶⁾と記されている。

これらから、旭川に関する記述は昔から存在しており、その記述内容も好意的なもので、岡山市における特徴の一つと考えることができると思われる。

b) 岡山市街地の自然景に関する記述

次に、岡山市内の自然景に関する具体的な記述をとりあげると、明治期の『ペリーの手記』に、「近くには起伏せる丘陵あり、遠くには山嶺が連なりて縁をかたどり肥沃な谷の如き所にある、魅力ある市であった。」⁹⁷⁾、「東山の麓より拡がっている美しい水田はドクターを誘って屢々その畦道の小径を歩く散策をさせました。その地区は四季の季節々々に従って景色が変化しました。軟泥の沼や池や湖とか、新鮮な緑色の樹々の芽とか黄色に熟した麦の

穂とかにかこまれた野を歩いている時には彼には恰も母親が作った縁どった布のつき合わせて作った、布団の上を歩いているが如き感じを催しました。」⁹⁸⁾という岡山市や市街地近辺に関する好意的な描写があり、日本人の同時期のものにも『福田英子集』に「仰いで前方を望めば、鬱蒼たる緑樹につつまれたる操山の連山あり、俯して下方を眺めば朝日川の清流は白帆を乗せて波静かなり、其景色得もいはれず」⁹⁹⁾という記述があって、明治時代の岡山市の自然を好意的に捉えていることがわかり、外国人、日本人問わず、その景色も賞讃されているが、それらの記述は戦前までであり、戦後になると、そういった好意的な記述はみられなくなっていた。

(2) 岡山市の人文景

人文景については、その記述内容の歴史の変遷を見ると、明治以降、後楽園に関する記述が最も多く、岡山城を含めた名所に関する記述が目立っていて、岡山市の人文景の中心は、後楽園や岡山城といった名所の描写であるといえる(図-12)。図-12も図-11と同様に、各対象の割合を示したものである。

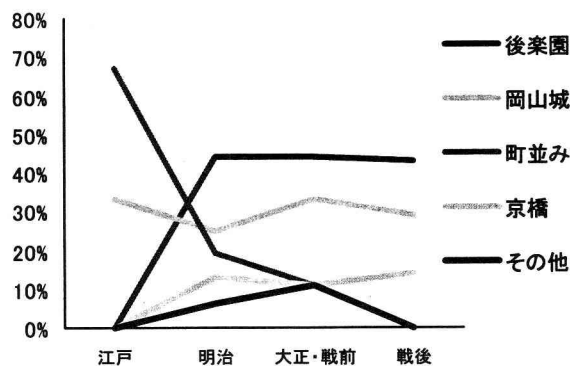


図-12 人文景における各対象の割合

また、岡山市の市街地風景、町並みについての描写は、あまり多くはなかったが、特に、町並みに関しては、江戸時代以降減少し続けている。その他に、戦前まで栄えていた所として、京橋付近に関する記述がいくつか見つかった。同様に、後楽園や岡山城付近の様子も、風景として、戦前までは好意的に記述されているが、戦後になると、それらに関する風景としての描写はみられなくなっている。これは、岡山市街地の中心部が戦争で焼かれて、岡山市の様子が一変してしまったこともあると思われるが、戦後、その辺りや岡山市の町並みに関する記述がみられなくなったということは、その復興の過程で魅力が失われていったと考えることができるのかもしれない。

a) 後楽園に関する記述

まず、人文景において、最も記述の多かった後楽園についての具体的な内容をみると、明治時代の『ラフカディオ・ハーン著作集』の中に、「岡山の例の公園を訪ねてみてください。ここでは、生きている鶴が見られます。一齡二百と言われる一羽もいます。—それに完璧な日本の趣味の

求めるすべてが見られます。』¹⁰⁰⁾という記述がチェンバレン(1850-1935)の書簡にあり、日本人のものにも、明治期の福田英子『妾の半生涯』に「この公園は旧三十五万石を領せる池田侯爵の後園にして、四時の眺め尽せぬ日本三公園の一なり。』¹⁰¹⁾という記述がある。

さらに、後樂園に関しては、大正・戦前期の田山花袋『旅』に「後樂園は、金澤の兼六園と水戸の偕樂園と比べて見て、矢張此處が一番好いと私は思ふ、兼六園などに比べては、餘程明るい藝術的の感じのする好い庭園である。』¹⁰²⁾と記され、戦後のものにも、『鄭津梁の日本見聞記』の中に、「本園が地方稀な名園であり、海外に誇る文化財であり、昭和二十七年(一九五二)十一月、特別名勝に指定された。』¹⁰³⁾という記述がみられるように、外国人や日本人、また、時代を問わず好意的な描写がなされていることがわかる。

そして、福田英子の「日本三公園の一」¹⁰⁴⁾という表現は、内田百閒等のその他の岡山市出身者にもみられるもので、岡山市出身者にとっては、後樂園は、故郷である岡山市の特徴となりうるものであり、彼らにとって、誇らしいものの一つとなっているという印象をうける。

b) 岡山城に関する記述

岡山城に関しても、後樂園と同様に、岡山市の名所として認識されており、明治時代の成島柳北『航薇日記』の「岡山の城池は山の麓に拠て築き、莊麗観るに足れり、しかれども險要の城郭には非ず」¹⁰⁵⁾という記述や戦後の『鄭津梁

の日本見聞記』の中に「旭川の向こうに岡山城がみえる。岡山城は天正元年(一五七三)宇喜多直家の築城したもので、開山開府のはじめであった。星霜三百六十年、今の城門、城は建て直したものである。鳥城の名は後樂園とともに天下に聞こえている。』¹⁰⁶⁾と記されているように、好意的に描写され、捉えられていることがわかる。

c) 京橋付近に関する記述

次に、名所以外の人文景に関してとりあげると、岡山市の風景において好意的に捉えられているものに、明治時代から戦時中までにおける、京橋付近に関する記述がある。京橋界隈は、明治期、問屋や木材店が並び、岡山の商業活動の表玄関として栄えていたため、船着場、町並み、その賑やかさ等が好意的に描写されていて、その記述は、戦前までの特徴としてあげられる。

まず、明治時代のものに、『航薇日記』の「京橋中橋小橋の三橋あり、此ほとりは皆熱鬧なり」¹⁰⁷⁾、『内田百閒全集』の「京橋から西は岡手で一番繁華な町並みが續いている。』¹⁰⁸⁾という記述があり、大正・戦前期の『旅』にも「市で一番賑やかだといふ京橋の畔」¹⁰⁹⁾という記述がみられる。さらに、戦時中の永井荷風の『罹災日録』にも「京橋に至る。欄に倚りて眺むるに右岸には数町にわたりて石級あり。(中略)絵の道知りたらば写生したき心地もせらるる景色なり。』¹¹⁰⁾、「京橋に至り船着場黄昏の風景を賞す。暮靄蒼然。水色山影一立斎広重の版画に彷彿たり。』¹¹¹⁾と

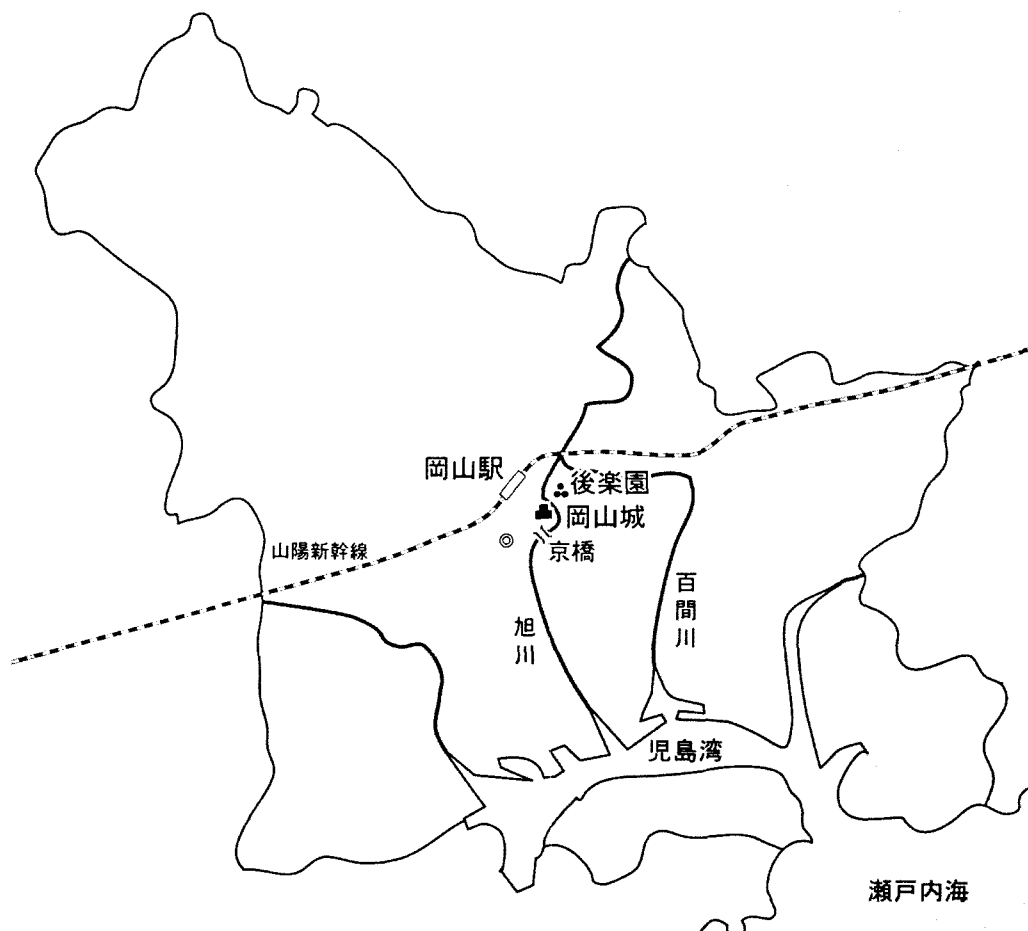


図-13 岡山市の地図(著者作成)

いう描写があつて、戦後になるとそれらの記述はみられなくなるが、かつては、その風景が好意的に捉えられていたということがわかる。

d)岡山市街地に関する記述

岡山市街地に関する記述も、京橋付近に関する記述と同様に、戦争前後でその記述内容が変化していることが特徴としてあげられる。

戦前ものでは、江戸時代の記述に、司馬江漢『江漢西遊日記』の「二里(約八^{キロ})の道を岡山に着く。よい城下町だ。二丁(約二一八^{キロ})の距離を置いて橋が二つかかっている」¹¹²⁾や菱屋平七(?)『筑紫紀行』の「城下の町筋の長さが五十丁(約五・四五^{キロ})、工商の家々が続き、富んだ者が多く、賑やかな城下町だ。」¹¹³⁾があり、好意的な描写がみられるが、その後、戦時中の『罹災日録』では、「大手らしき城門の石垣に密接したまたは古松鬱然たるところ人家の散在するあり。宏大なる国民学校の校舎、工場の如く城壁の間に屹立するあり。今これに由つて四辺の光景を觀察するに、岡山の市民は明治廃藩の後この地特有の史蹟を珍重するの心なく、乱雑に家屋を建設し、毫も市街の美観と品位とに就いて考慮するところなかりしを知るに足るべし。」¹¹⁴⁾と岡山市街地の風景に関して、否定的な記述がみられるようになる。

そして、戦後になると、内田百閒著『阿房列車』の「三萬三千戸あった町家が、ぐるりの、町外れの三千戸を残して、みんな焼き払われた晩に、子供の時から見馴れたお城も焼けてしまった。」¹¹⁵⁾という記述にあるように戦争による市街地の変化があげられ、その後は『郭沫若・日本の旅』の「岡山市は戦争中、火に焼かれたと聞いたが、完全に回復されていた」¹¹⁶⁾という記述やコータツツィ(1924-)『東の島国西の島国』の「県がぐんぐんと変貌する様を目のあたりにしてきた。私にとって現在の岡山県は、中国地方有数の繁栄を誇る県といった印象である。」¹¹⁷⁾という記述があるだけで、岡山市の復興に関する様子は記されていても、戦後の岡山市街地の風景に関する描写はほとんどみられなくなり、風景としての岡山市の町並みの描写も見つからなかった。

岡山市において、風景に関する記述が見つかり、本章でとりあげたこれらの場所を図-13に示す。

5. 倉敷市、瀬戸内海沿岸地域に関する記述

本章では、岡山市に隣接する倉敷市や瀬戸内海沿岸地域(図-1参照)に関する記述をとりあげることで、岡山市との比較を行い、風景描写における差異を明確にして、その特徴を探ることを試みている。

(1)倉敷市に関する記述

倉敷市に関する記述数の歴史の変遷を見ると、倉敷市は、岡山市とは対照的に戦後になって記述数が増加し、特に外国人の記述は戦後になってから現れている(図-14)。

また、記述内容をみると、外国人は、美観地区や大原美術館を中心にして、名所とともに町並みに関する好意的な描

写を行っている。特に、戦前の倉敷市についての記述が、ほとんどなかったことに比べると、戦後の倉敷市の中心市街地についての記述は特徴的であるといえる。

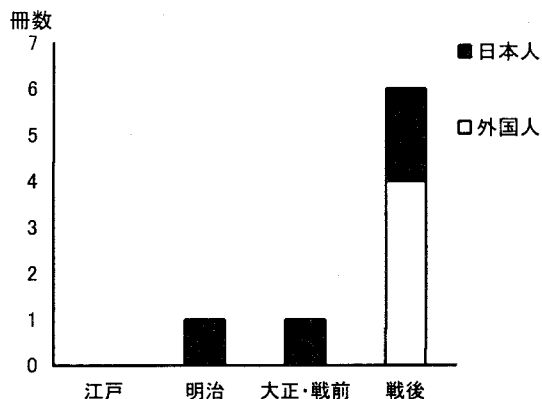


図-14 倉敷市の記述数の変遷

a)戦前の倉敷市に関する記述

記述数やその内容に特徴的な変化があつた戦前と戦後の具体的な記述内容をみても、まず、戦前の倉敷市に関する記述があるのは、倉敷市の出身者である大原孫三郎(1880-1943)、大原總一郎親子に関する書物があるのみで、明治時代の倉敷市に関する記述がある『伝記 大原孫三郎』の「御一新後の大改革で、倉敷の衰退は、まるで秋の日のつるべ落としの状況である。」¹¹⁸⁾や大正・戦前期のことを記した『へこたれない理想主義者』の「元倉敷の掘割は、昭和二十年代までは海につながる運河として、生活物資の運搬に使われていた。つまり当時は観光地ではなく、そこに生きる人々の生活の場だったのである。従って家々の白壁は、今とは違って汚れ、傷み、運河の役目を終えた頃の掘割は、汚水が悪臭を放っていた。」¹¹⁹⁾という記述から、戦前の倉敷市に関しては、好意的な描写はなされていないことや特にその風景もとりあげられていないことがわかる。

b)戦後の倉敷市に関する記述

戦後になると、外国人による倉敷市に関する記述がみられるようになり、その記述内容も好意的なものに変化している。ブランデンの『日本遍路』には、「倉敷の場合もそうだ。誰でも倉敷を見なくてはならぬと、大ざっぱに言つてもよいと思う。ここには、戦争が皮をはいたり、粉にしたり、そのほか戦争の好んでやるもの一切を逃れた古い伝統の町があるのだ。その家は幻でなくて、十分成熟している。町全体がよくまとまっている。それはもともと必要な資源と合体しているからだ。……町の発展にはあわただしきはなかつた。物資が十分にあつたのだ。」¹²⁰⁾という記述があり、『鄭津梁の日本見聞記』では、「日本の民家の美しさを巧みに保存し、倉敷を訪れる外人からも、まじりけのない純粹の日本の姿を賞讃されている。」¹²¹⁾や「土蔵造りの小路、本葺き屋根の波がつづいて、柳の木が倉敷川に沿っていて、いつみてもあきない。このような風

景は日本では多くないであろう。」¹²²⁾という記述がみられ、『東の島国 西の島国』にも「岡山経由の旅をする英国人には、短時間でもよいからせめて倉敷だけでも見ておくように、といつも勧めているひとりである。」¹²³⁾と記述されていて、全て倉敷市に関する好意的な描写になっている。

また、その内容も、岡山市が戦後、その町並みや市街地の風景に関する描写がなくなっているのと対照的に、倉敷市の町並みといった人文景がとりあげられ、それに関して賞讃しているものとなっている。

(2) 瀬戸内海沿岸地域に関する記述

瀬戸内海沿岸についての記述の歴史の変遷を見ると、その記述は、江戸時代に多く見付き、その時期では、外国人、日本人ともに牛窓(現牛窓町)や下津井(現倉敷市)等に関する好意的な記述がなされている。しかし、その後、船舶や鉄道の発達等で岡山の瀬戸内海沿岸部にある港が利用されなくなったことや瀬戸内海自体が景勝地として認識されるようになり、その沿岸部は、展望地としてしかみられなくなったこと等によって、その記述数は減っている(図-15)。そして、記述内容も戦後になると、特に外国人において変化がみられる。

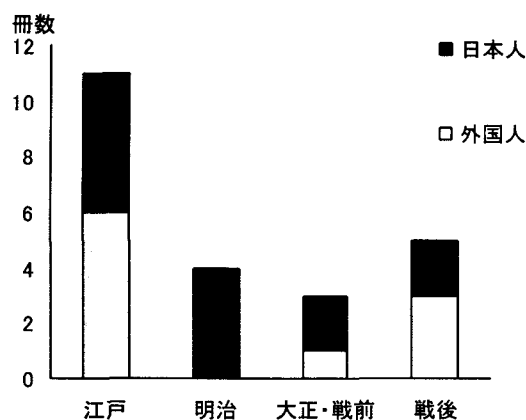


図-15 瀬戸内海沿岸地域の記述数の変遷

a) 戦前の瀬戸内海沿岸地域に関する記述

瀬戸内海がよく利用されていた江戸時代には、風待ち、潮待ち等の要因もあって、岡山の瀬戸内海沿岸部に関する記述も多数みられる。ケンペル(1651-1716)の『日本誌』には、「そこから8里先の北側に美しい村落牛窓(うしまど Sjimado, Ursjimado)が見えた。」¹²⁴⁾という記述があり、金仁謙(1707-?)の『日東壮遊歌』にも「七里ほどで牛窓に到着 館所へ赴く この船着き場は天然の良港であり 町並みも立派である」¹²⁵⁾という牛窓に関する好意的な記述がみられる。牛窓に関しては、明治時代の日本人においても、『航薇日記』に「陸に上り牛窓の市井を徘徊す、頗る繁華なるに驚けり」¹²⁶⁾と記されている。

その他にも、江戸時代のシーボルト(1796-1866)『日本』に「向日比と日比はたいへん感じが良かったすまいの村

で、住民たちの様子や住いの建築様式から判断しても、彼らは裕福だと思う。」¹²⁷⁾と日比付近(現玉野市)に関する記述があり、この時代の瀬戸内海沿岸地域は外国人によって、好意的に捉えられていることがわかる。

b) 戦後の瀬戸内海沿岸地域に関する記述

戦後になると、記述数はやや増加しているが、その記述内容は大きく変化し、特に外国人においては、リチー(1924-)の『日本人への旅』に、「文明というものは必ずその周辺を散らかし、汚してしまう。こうして郊外は乱雑をきわめ、港町は見苦しく姿を変える。」¹²⁸⁾と記され、ブース(1946-1993)の『ニッポン縦断日記』では、「ある意味で、中国地方は本州全体の縮図といえる。ぼくの歩いていた一方の沿岸は人口過密でいやになるほど“発展”している。産業の吐きだすがらくたがかつてはロマンチックだった瀬戸内海の岸を醜悪なものにしており、ぼくが九八日目に見た日本文明の唯一の記念碑たるかぞえきれないほどの煙突は、赤と白の縞模様塗りに塗られていても、少しも美しくはなかった。」¹²⁹⁾と記され、瀬戸内海沿岸地域に対する否定的な描写がなされている。

この記述内容の変化も特徴の一つとしてあげられ、かつては、瀬戸内海と同様に肯定的に捉えられてきた瀬戸内海沿岸地域が、戦後になり、瀬戸内海とは切り離され、景勝地としての瀬戸内海とは別に、否定的な地域として認識されるようになったといえる。また、瀬戸内海は岡山市と関連したものとして捉えられてはいたが、戦後の瀬戸内海自体に関する賞賛も岡山市とは関係ないものとなっているといえる。

6. まとめ

本論文では、近世以降昭和期までの岡山の風景描写を文芸書・旅行記から抽出し、岡山市を中心にして、その記述の歴史の変遷や記述内容を分析することによって、岡山市の特徴や地域性を明らかにしようとした。まとめとして、以下の3点をあげる。

(1) 岡山市では、各時代を通して、旭川を中心とした河川や自然の描写が多く、特に、旭川については、時代を問わず好意的な記述がみられ、岡山市の特徴の一つとなりうるものである。また、人文景では、後樂園や岡山城等の名所に関する記述が多く、その歴史や文化は、岡山市の風景においても財産になりうるものである。

(2) 岡山市に関する風景描写は、倉敷市のものとは対照的で、明治以降の岡山市の記述は減少しているのに対し、倉敷市に関する記述は、特に戦後になってから、とりあげられた数が急増し、外国人による好意的な記述も目立つ。さらに、記述内容を見ても、岡山市に関する記述の中心は、自然景であり、戦後、岡山市の記述数の減少とともに、人文景における町並みや市街風景等に関する描写がほとんどみられなくなっているのに対し、倉敷市の記述の中心は、人文景における美観地区であり、その町並みについてである。

(3) 瀬戸内海沿岸地域については、江戸時代から明治時代頃までは、その沿岸の自然だけではなく、港や町並みに

関する好意的な記述も見つかったが、次第にその記述数も減り、瀬戸内海沿岸部は、瀬戸内海とは切り離されて捉えられるようになり、戦後には、外国人による否定的な記述も現れている。また、瀬戸内海自体に関する賞賛はあっても、その沿岸部や岡山市は、展望地として捉えられているだけで、瀬戸内海と岡山市との関連はみられない。

これらから、岡山市の特徴は、旭川を中心とした自然であり、後楽園等の名所に関わるものであるといえる。また、倉敷市との比較で明らかになったように、戦後、岡山市の人文景、特に、市街風景や町並みについては、とりあげられることはなく、好意的な描写もみられなかった。これは、戦前までの風景が、戦後の復興や町づくりに活かされなかったということであるといえる。例えば、岡山市にある京橋は、今も現存しているが、戦後、その記述がみられなくなったように、はたして、それが持つ歴史を活かしているといえるだろうか。岡山市という地域にしかないものであれば、やはりそれは活かすべき遺産であり、少なくとも、本論文で明らかになった、岡山市にある自然、歴史や文化を含むもの、それらは岡山市の特徴となりうるものであり、それらを活用した地域づくりを行っていくことで、岡山らしさはより明確になっていくのではないかと思われる。

今後の課題としては、それらをどのように活かすか、現在もそれらは魅力あるものとして捉えられているか等の考察が必要であると考えられる。また、今回は書物の調査だけであったが、その他の絵画や写真といった資料を調べることも有効であるかもしれない。

そして、よりよい風景、地域づくりを行うためには、その地域の歴史を知り、その地域に興味を持つことが重要であり、かつての魅力を認識することは、その手がかりとなり、第一歩になると考えられる。

参考文献

- 1) 志賀重昂：『日本風景論』，岩波書店，1937 ほか
- 2) 西田正憲：『瀬戸内海の発見』，中央公論新社，1999 ほか
- 3) 日蘭学会(編)，日蘭交渉史研究会(訳)：『長崎オランダ商館日記 七』，雄松堂出版，1996
- 4) 村上直次郎(訳)：『長崎オランダ商館の日記 第一輯』，岩波書店，1956
- 5) 村上直次郎(訳)：『長崎オランダ商館の日記 第二輯』，岩波書店，1957
- 6) 村上直次郎(訳)：『長崎オランダ商館の日記 第三輯』，岩波書店，1958
- 7) Kaempfer Engelbert(著)，今井正(訳)：『改訂・増補日本誌』《第6分冊》，霞ヶ関出版，2001
- 8) Siebold Philipp Franz von(著)，中井晶夫・齋藤信(訳)：『日本』(第2巻)，雄松堂書店，1978
- 9) Siebold Philipp Franz von(著)，齋藤信(訳)：『シーボルト 参府旅行中の日記』，思文閣出版，1983
- 10) 姜在彦(訳注)：『海游録』，平凡社，1974
- 11) 高島淑郎(訳注)：『日東壮遊歌』，平凡社，1999
- 12) 辛基秀(編)：『わが町に来た朝鮮通信使 I』，明石書店，1993
- 13) 板坂耀子(校訂)：『近世紀行集成』，国書刊行会，

- 1991
- 14) 濱田義一郎(編)：『大田南畝全集 第八巻』，岩波書店，1986
- 15) 富岡敬之(編)：『岡山紀行今昔』，山陽新聞社，1980
- 16) Hearn Lafcadio(著)，斎藤正二ほか(訳)：『ラフカディオ・ハーン著作集 第十四巻』，恒文社，1983
- 17) Katherine Fiske Berry(著)，更井美子(訳)：『ペリーの手記』，岡山市立図書館，1949
- 18) A T R Mulder(著)，日本翻訳センター(訳)：『日本列島の三つの海峡』，建設省岡山河川工事事務所，1993
- 19) 岡山市水道局(編)：『岡山市水道誌』，岡山市水道局，1965
- 20) 岡山県社会事業協会(編)：『アダムス女史一夕話』，岡山県社会事業協会，1933
- 21) 成島柳北：『明治文學全集 4』，筑摩書房，1969
- 22) 森林太郎(著)，木下空太郎ほか(編)：『鷗外全集 第三十五巻』，岩波書店，1975
- 23) 夏目漱石：『漱石全集 第十四巻 書簡集』，岩波書店，1966
- 24) 福田清人(編)：『明治紀行文學集』，筑摩書房，1974
- 25) 後藤暢子他(編)：『山田耕筰著作全集 3』，岩波書店，2001
- 26) 田岡嶺雲・長谷川如是閑：『日本人の自伝 4』，平凡社，1982
- 27) 河合徹(編集責任)：『凍てつく大地に種子を』，黒田壽男顕彰事業推進会，1983
- 28) 薄田泣菫：『艸木虫魚』，岩波書店，1998
- 29) 木山捷平：『角帯兵児帯・わが半生記』，講談社，1996
- 30) 木山捷平：『木山捷平全詩集』，講談社，1996
- 31) 片山潜他：『日本人の自伝 8』，平凡社，1981
- 32) 正宗白鳥：『正宗白鳥全集 第十二巻』，新潮社，1966
- 33) 正宗白鳥：『正宗白鳥集(一)』，筑摩書房，1967
- 34) 竹久夢二(著)，長田幹雄(編)：『夢二書簡 1』，夢寺書坊，1991
- 35) 竹久夢二(著)，長田幹雄(編)：『夢二書簡 2』，夢寺書坊，1991
- 36) 竹久夢二(著)，長田幹雄(編)：『夢二日記 2』，筑摩書房，1987
- 37) 竹久夢二(著)，長田幹雄(編)：『夢二日記 3』，筑摩書房，1987
- 38) 岩田準一(編)：『夢二抒情書選集 上巻』，ほるぷ出版，1985
- 39) 竹久夢二：『露台薄暮』，ほるぷ出版，1985
- 40) 竹久夢二：『草の実』，ほるぷ出版，1985
- 41) 城山三郎：『わしの眼は十年先が見える』，飛鳥新社，1994
- 42) 犬飼亀三郎：『大原孫三郎父子と原澄治』，倉敷新聞社，1973
- 43) 木村毅：『伝記 大原孫三郎』，岡山市立図書館，1976
- 44) 大内兵衛(述)：『偉大なる財界人大原孫三郎』，第11回全国統計大会事務，1961
- 45) 大原孫三郎傳刊行会(編)：『大原孫三郎傳』，大原孫三郎傳刊行会，1983
- 46) 福田英子：『妾の半生涯』，岩波書店，1958

- 47) 村田静子・大木基子(編):『福田英子集』, 不二出版, 1998
- 48) 内田百閒:『新輯内田百閒全集』, 福武書店, 1986-1989
- 49) 内田百閒:『阿房列車』, 筑摩書房, 2002
- 50) 郭沫若(著), 小野忍・丸山昇(訳):『郭沫若自伝 2』, 平凡社, 1968
- 51) 郭沫若(著), 小峰王親・桑山龍平(譯):『郭沫若作品集 上』, 青木書店, 1953
- 52) 劉徳有:『郭沫若・日本の旅』, サイマル出版会, 1992
- 53) 武継平:『異文化のなかの郭沫若』, 九州大学出版会, 2002
- 54) 郭沫若先生詩碑建設委員会(編):『日本と中国を結ぶ友情のかけはし』, 郭沫若先生詩碑建設委員会, 1961
- 55) 陶晶孫:『日本への遺書』, 創元社, 1952
- 56) F Starr:『山陽行脚』, 金尾文淵堂, 1917
- 57) Claudel Paul(著), 奈良道子(訳):『孤独な帝国日本の一九二〇年代』, 草思社, 1999
- 58) 脇水鐵五郎:『車窓から見た自然界—山陽道—』, 誠文堂新光社, 1944
- 59) 柳宗悦:『柳宗悦全集 第二十一卷中』, 筑摩書房, 1989
- 60) 柳宗悦:『柳宗悦全集 第二十一卷下』, 筑摩書房, 1989
- 61) 田山花袋:『旅』, 博文館, 1917
- 62) 田山花袋:『田山花袋全集 第十六卷』, 文泉堂書店, 1974
- 63) 井上太郎:『へこたれない理想主義者』, 中央公論社, 1993
- 64) 大原總一郎:『大原總一郎随想全集 1』, 福武書店, 1981
- 65) 大原總一郎:『大原總一郎随想全集 2』, 福武書店, 1981
- 66) 吉行あぐり:『梅桃が実るとき』, 文園社, 1985
- 67) 吉行あぐり:『あぐり95年の奇跡』, 集英社, 2002
- 68) 吉行あぐり:『「あぐり美容室」とともに』, PHP研究所, 2002
- 69) 坪田譲治:『坪田譲治全集』, 新潮社, 1977-1978
- 70) Cortazzi Hugh:『東の島国 西の島国』, 中央公論社, 1984
- 71) Cortazzi Hugh(著), 松村耕輔(訳):『日英の間で』, 日本経済新聞社, 1998
- 72) 鄭津梁:『鄭津梁の日本見聞記』, 徳島出版, 1985
- 73) Blunden Edmund(著), 富山茂(訳):『日本遍路』, 朝日新聞社, 1950
- 74) Leach Bernard(著), 福田陸太郎(訳):『東と西を超えて』, 日本経済新聞社, 1982
- 75) Leach Bernard(著), 柳宗悦(訳), 水尾比呂志(補訳):『バーナード・リーチ日本絵日記』, 講談社, 2002
- 76) Richie Donald(著), 山本喜久男(訳):『日本人への旅』, ティビーエス・ブリタニカ, 1981
- 77) Alan Booth(著), 柴田京子(訳):『ニッポン縦断日記』, 東京書籍, 1988
- 78) 石田寛(編):『外国人による日本地域研究の軌跡』, 古今書院, 1985
- 79) 平野謙他(編):『戦争文学全集 第三巻』, 毎日新聞社, 1971
- 80) 谷崎潤一郎:『谷崎潤一郎全集 第十六巻』, 中央公論社, 1982
- 81) 横溝正史(著), 新保博久(編):『横溝正史自伝的随筆集』, 角川書店, 2002
- 82) 横溝正史:『金田一耕助のモノローグ』, 角川書店, 1993
- 83) 横溝正史:『探偵小説五十年』, 講談社, 1977
- 84) 江戸川乱歩:『探偵小説四十年』, 沖積舎, 1989
- 85) 井伏鱒二:『井伏鱒二全集第二十三巻』, 筑摩書房, 1998
- 86) 井伏鱒二:『井伏鱒二全集別巻二』, 筑摩書房, 2000
- 87) 清岡卓行ほか(著), 井上靖ほか(編):『昭和文学全集 30』, 小学館, 1988
- 88) 野田知佑:『日本の川を旅する』, 講談社, 1989
- 89) 宮脇俊三:『時刻表おくのほそ道』, 文藝春秋, 1984
- 90) 宮脇俊三:『線路のない時刻表』, 新潮社, 1986
- 91) 小川洋子:『妖精が舞い下りる夜』, 角川書店, 1993
- 92) 吉行淳之介:『日々すれすれ』, 読売新聞社, 1987
- 93) 吉行淳之介:『吉行淳之介全集 第十四巻』, 新潮社, 1998
- 94) 前掲 17), p.3
- 95) 前掲 52), p.156
- 96) 前掲 27), p.42
- 97) 前掲 17), p.3
- 98) 前掲 17), p.121-122
- 99) 前掲 47), p.211
- 100) 前掲 16), p.569
- 101) 前掲 46), p.94
- 102) 前掲 61), p.234
- 103) 前掲 72), p.164
- 104) 前掲 46), p.94
- 105) 前掲 21), p.101
- 106) 前掲 72), p.167
- 107) 前掲 21), p.101
- 108) 内田百閒:『新輯内田百閒全集第二十一巻』, 福武書店, p241, 1988
- 109) 前掲 61), p.47
- 110) 前掲 79), p.26
- 111) 前掲 79), p.27
- 112) 前掲 15), p.61
- 113) 前掲 15), p.88
- 114) 前掲 79), p.28
- 115) 前掲 49), p.132
- 116) 前掲 52), p.155
- 117) 前掲 70), p.112
- 118) 前掲 43), p.4
- 119) 前掲 63), p.250
- 120) 前掲 73), p.110
- 121) 前掲 72), p.185
- 122) 前掲 72), p.191
- 123) 前掲 70), p.113
- 124) 前掲 7), p.824
- 125) 前掲 11), p.224
- 126) 前掲 21), p.100
- 127) 前掲 9), p.37
- 128) 前掲 76), p.127
- 129) 前掲 77), p.275